

小倉斉先生をお送りする

竹内 瑞穂

本学国文学科教授（大学院文化創造研究科国文学専修兼任）小倉斉先生が、定年により本年三月をもってご退職されることになりました。

先生は一九八三年四月に愛知淑徳短期大学国文学科専任講師として着任され、一九八八年四月に助教、一九九三年に教授に昇格されています。一九九八年四月には文学部国文学科教授として愛知淑徳大学へと所属を移され、現在に至っています（なお、一九九八年四月より大学院文学研究科教授、二〇一三年四月より大学院文化創造研究科教授を兼任）。ご着任以来、三九年の長きにわたってこの愛知淑徳学園に奉職されてきたことになりましたが、その間には近・現代文学の専門家として国文学科専門科目の担当をお務めになるだけにとどまらず、二〇〇七年四月から二〇〇九年三月まで国文学科主任、二〇〇九年四月から二〇一三年三月、および二〇一五年四月から二〇一九年三月まで文学部長、二〇一〇年四月から二〇一四年三月まで愛知淑徳大学全学日本語教育部門長、二〇一四年四月から二〇一五年三月まで愛知淑徳大学初年次教育部門長、二〇一四年四月から二〇一九年三月まで愛知淑徳大学教職・司書・学芸員教育センター長を歴任し、数々の重責を果たされてきました。なかでも、教職・司書・学芸員教育センター長として取り組まれた教員育成システムの整備・拡充などは、本学教育体制の重要な柱のひとつを築き上げた大きなお仕事であったといえます。旧来の組織の大幅な改変

を伴い、関係各所との綿密な調整が求められる困難な事業でしたが、それが無事成し遂げられたのは、先生の明確なヴィジョンと人並み外れたご尽力があつたがゆえだと思われれます。

また、先生のご業績は学校業務のみにとどまりません。研究者としては森鷗外の小説や評論活動を中心に、明治期から現代に至るまでの近・現代文学を幅広く考究されてきました。その著作は、別掲の研究業績に示されるように多数にのぼります。斯界における研究および人物に対する評価は非常に高く、これまでも日本近代文学会の評議委員などを歴任し、学会を牽引し続けていらつしやいます。そして、学生への教育に対する情熱は、まさに特筆すべきものでありました。学生自身に深く思考することを求める講義は、真摯に文学と向き合おうとする学生たちを惹きつけてやみませんでした。また、ゼミでは発表ごとに手書きでレポートを書かせ、個々人に対して毎度丁寧な添削をして返すという手間のかかるご指導を続けてこられました。先生の長年にわたる精力的な教育活動のもと、社会で活躍するに足る思考力と文章力とを身につけた人材を数多輩出することができたことは、本学科の誇りとするところです。

私が先生と初めてお会いしたのは、一八年ほど前だったかと思ひます。まだ院生であつた私からみれば、当然ながら小倉「先生」だったわけですが、本学と同じ教員として勤務するようになってからも、やはり「先生」であり続けました。学生に対する振る舞いや、研究と向かい合う姿勢、校務への対応など、先生の行いひとつひとつが駆け出しの教員・研究者であつた私にとっては良き見本・目標でした。先生が以前さらりとおつしやられた「まずは、いい授業をしてください」という言葉は、大学教員が忘れてはならない指針として胸に刻み込まれております。先生のご退職は、私のみならず本学科にとって大きな痛手ですが、先生が残されたご功績を生かしながら、今後より良い国文学科を築き上げて参ります。

先生には、来年度以降も近・現代ゼミのひとつをご担当いただくことになっておりますので、今後この国文学科とのご縁は続くこととなります。我々教員も学生も先生から学ぶべきことがまだまだ残っております。お立場は変わられますが、これまで同様にご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

(文学部国文学科主任)